

日仏比較国語教育研究

——フランス中学校の学習指導要領を中心に——

中 西 一 弘

はじめに

教授要目と教授方法

構成

ことばの学習

作家、作品

実施すべき練習と教授方法

おわりに

資料

はじめに

フランスの教育行政は、強度の中央集権と教育専門家による支配とを大きな特色としている。(注一)。文部大臣、大学区総長、大学区視学官という系統によって、教育内容、方法、人事などは、全学区の各学校に徹底させられるのである。一方、その教育内容、方法などは、公教育高等評議会 (Conseil supérieur de l'Instruction publique) という文部大臣の最高諮問機関が決定する。大臣が重大な改正を企てる場合は、必ずその諮問を経なければならぬ

い。この教育専門家からなる評議会は、変動の激しい政界の影響から、国民教育の中立性を守る働きをしていると同時に、よりすぐれた教育への努力を果している。これら専門家の研究成果は、集約されて、法令、または、通達の形で文部省 (国民教育省 *Ministère de l'Education Nationale*) から、各学校に配布され、それに基づいて、教育活動の具体的指導がおこなわれている (注二)。よって、これらはフランスの教育の方向を定め、その中枢部をなしている、わが国の指導要領にあたるものといえる。次に、その一つ、五六年一月一日に出版された、*Horaires, Programmes, Méthodes de l'Enseignement du Secondaire* (中等教育における時間配当表、教授要目、教育方法) のうち、国語教育に関する部分 (注三) を取り上げ、日仏比較国語教育研究の一端としたい。

注一、教育学事典 (平凡社) 第六卷、世界の教育、フランスの項参照。

注二、本稿で資料としたものには、一八九〇年代から現在にいたるものが集約されている。全面的変更は少なく、一部ずつの改

正が多い。総則などでも、一八九〇年の総則の一部が掲げられ、その精神は現在なお生きていると注記されている。

注三、国語、すなわち、フランス語の教育は、ギリシャ語、ラテン語と一括され、*Lettre*（文学、ことば）の教科の一つに位置している。外国語は近代外国語として全然別にある。

なお、「時間配当表」は、注一の書物にもあり、本稿では省略する。

プログラム 教授要目

構成。「教授要目」は、「ことばの学習」、「実施すべき練習」、「作家、作品」の三項目からなり、各学級（各学年のこと。ただし、第六学級が最下級、日本の新制中学一年に当たる。以下、逆になる。）にわたっている。

「ことばの学習」は、言語に関する指導事項を示し、「作家、作品」の項は、教材の選定をおこなっている。この指導事項をふまえ、決定された教材を通して、どのような学習活動を実施するか、その学習活動の諸形態を示したのが、「実施すべき練習」の項である。

以上、指導事項（言語に関する）、教材、学習活動の形態の三点から、「教授要目」は構成され、設定されている。

なお、「教授方法」は、「実施すべき練習」で決められた、学習形態別に説明されていて、「実施すべき練習」（学習形態）の具体的な実践方法（その障害除去法など）を示すのをねらいとしている。

故に、「実施すべき練習」は、「教授方法」と一体となり、他の二項目とあいまって、フランス国語教育を規定しているのである。

○
ことばの学習。この項は、前述のように、各学級において、生徒が習得すべき言語知識——綴字法、句読法、文法（語論、文論）、文章論、語史、詩法——を提示している。

第六、五、四学級では、一応、言語それ自体の体系が学習できるように、諸事項の系統的配列がなされ、第四学級でその大体が終了するようになっている。文法において、語論と文論とが平行して取り上げられているのが注目を引く。

第三、二、一学級では、A「テクスト解釈」、B「作文」の学習を通して、言語の機能、変遷などを実際に把握させようとしている。言語を思想（感情）表現の観点から考察させるのである。第六、五、四学級で習得した知識の応用段階である。体系的把握と実例による具体的理解の綜合がめざされている。

十七世紀に早くも標準語設定を遂行し、以来その線にそって、明晰、正確、論理をめざして洗練の度を加えてきた言語意識の高さとその拡がりとは、指導事項として、特に「ことばの学習」の項を要求し、言語の分析を通して、国語の自覚へと導く目標（目標b）を定めたものと考えられる。なお、このような言語意識の向上、鋭さが、「ことば」の完成段階であり、その精華である「文学」に結実し、「文学」を教材として活用させる原動力の一つとなったといえる。

○
このように言語意識の高い国柄であるからか、言語そのもの面からの指導事項設定がなされ、一方、生徒の言語使用能力、態度などの観点からの言及は見られない。陶冶財からの設定である。

作家、作品。教材選定の項で、教科書編集の基準を示している。

この項は、作品の一小部分を詳細に、徹底的に分折して解釈する、(I)「テクスト解釈」と、抜萃でなく、全部を、早く、多く読ませる、(II)「読書指導」の二つに分かれている。前者の「テクスト解釈」は、自国の古典的文学作品をはじめ、中世、古代、諸外国の有名な諸作品(翻訳)を広く求めて掲げている。多説と精説、視野の広さと読みの深さ、と常に読書において問題となるこの二面の綜合をめざしているのである。

次に、(I)の教材選定と学級配当の基準についてみると、(I)「テクスト解釈」では、十七世紀以後、すなわち、近代フランス語が確立し、整備された時代以後二十世紀初頭までの散文、韻文の選集を中心に、それに内容と文章の難易に従って各学級に当てられた諸作品が加わっている。個々の作品——特定の時代、ジャンル、流派に属する作品のいくつかと、近代文学全体が選覧できるように史的編集がなされた選集との両者によって、いつも文学の学習者が考慮すべき伝統と独創という観点を提供しているのである。

以上の基準によって選定された教材のなかで最も重要視され、従って最も最大なのは、十七世紀を中心とした古典文学作品である。

ことに、コルネーユ、ラシーヌ、モリエールは、各々、一作品全部を解釈することが要求されている。この三作家のものだけでなく、ラ・フォンテーヌ、ボワロー、その他の十七世紀の作家の作品なども多い。これは十七世紀文学がフランス人の理想を具現しており、その文学作品の内包する諸特質が、情操、思考——明晰、正確、論理の陶冶に尽すところ大と見られているからであろう。

十七世紀に次いで十八世紀の文学作品であり、十六世紀がこれ

につづく。十七(十八)世紀の古典期に対応する十九(二十)世紀の文学作品は、選集という形で取り入れられ、前述の史的展望のための教材とされている他は、十七、十八世紀のそのように単独で教材に選定されているのは数が少ない。二十世紀の作品になるとほとんどない。

(II)「読書指導」の場合は、自国の文学作品からその直接の祖先にあたる中世文学へ、さらに古代オリエント、ギリシャ、ローマの作品、または外国の文学へと広がっている。ヨーロッパ文化の伝統を身につけることと共に、同じ *Lettre* (ことば、文学) の教育であるラテン語、ギリシャ語学習や他教科(歴史)との関連を考慮に入れている。

文学作品であること、これが教材についていえる一番大きな特色である。もちろん、フランスにあつては「文学」の領域は非常に広範囲で、自然科学、社会科学の著述や政治家の議会演説、宗教家の説教なども歴々文学の範疇に入れられていることは考慮する必要がある。すぐれた表現であれば、内容の如何を問わず文学だとする見方である。しかし、やはり、いわゆる文学作品がその中核であり、精髓であることはいうまでもない。

要するに、フランス国語教育に用いられる教材は、全く文学作品中心であり、それも古典的——完璧な、理想的な、規範としての——文学作品であるといえる。

○

実施すべき練習と教授方法。各学級でおこなうべき学習活動と、その方法について指示している項である。

余学級を通しておこなう学習活動には「テクスト解釈と読書指

導」、「解釈済みのテキスト暗誦と朗読の練習」、「問題を設けて、書物の内容を報告させたり、批評させたりしながら、生徒に正確で、気軽に表現することに馴れさせる課外の読書」（第六学級のみなし）がある。これらはフランス中等教育（国語科）において一貫しておこなわれている学習活動であるが、これと対照的に学級によって学習活動に変化を与えるのがある。「書く（作文の）」学習活動がそれである。次にそれを掲げると、

第六学級

「観察ならびに描写の、口頭による共同練習と書く練習」（6）「模範的作品として教室で読み、解釈済みの物語から、特に感動を感付たことについて、口頭で発表するとともに、記述する小練習」（7）

第五学級

前学級の（6）、（7）とともに、
「文法的形式及び他のいろいろな言いまわしによる思考の表現方法についての練習」（9）

第四学級

前学級の（9）とともに、
「与えられた主題について、構想をたて、文章を作る口頭の共同練習」（6）
「主として物語や写生の性格をもつ簡単な作文」（7）

第三、二、

前学級の（6）と、
「作文の練習」（1）

一学級

以上のように、「書く（作文の）」学習活動であることは全学級を通じて変わらないが、その学習活動にはさまざまな段階が考慮されている。国語の上においても、第六、五、四学級では Réduction

であり、第三、二、一学級のそれは Composition となっているのである。このように全学級を通して発展的におこなわれる学習活動と、一貫してなされる学習活動とが、フランスの学習活動の特色を代表するものである。

次いで、一つ一つの学習活動が多くの能力、多方面の活動を必要としているもの顯著な特色である。

「問題を設けて、書物の内容を報告させたり、批評させたりしながら、正確で気軽に表現することに馴れさせる科外の読書」や、「テキスト解釈」にしても、読む学習であるが、各々の方式に従って、読み取ったもの、解釈したものを記述し、誰をも納得させるように表現に注意を払う作業でもある。しかも、「テキスト解釈」では、作業の最後の内容をみごとに表出するような朗読によって、自己の内奥にて把握し、感得したものを示さねばならないのである。一方、「作文」においても、「解釈」と関連しておこなわれている、第六、五学級の（7）の項目が典型的にそれを示している。その他に、「作文」の最終目標ともいべきものに「論文」があり、それは、作家、批評家の有名な「ことば」を取り上げ、意味をさぐり、それに基づく解説、論評をおこなうのである。「テキスト解釈」の「読書指導」「書物の紹介、報告、批評」などの成果をまとめ、総合的に発展させる学習である。また、「書く」学習が、多く口頭練習と結びついているのが注目を引く。

以上のように、フランス国語教育の中核をなす学習諸活動は、その一つ一つに、「読む」「書く」「話す（朗読）」の三活動が有機的に結合しつつ、諸技能を涵養しようとしている。

言語を主とした指導事項（「ことばの学習」）、の多学級の教

材（「作家、作品」）を踏まえ、両者を綜合的に——言語教育と文
学教育の統一——学習し、かつ、多方面の能力を伸長させようとす
るのが、この「実施すべき練習」のねらいである。

「教授方法」は、以上の学習諸活動の特性を十分に生かすよう考
えられている。すなわち「方法」の項目でとくに要請されているの
も、学習活動相互の有機的連関を保つことである。「書取」を例に
あげると、「書取」の内容は、

a 最近終了したか、もしくは、すぐ次に学習する予定の文法的
事項を例示しているか。

b この書取につづく「テキスト解釈」か、もしくは、すでに学
習し終えたそれと相応じている。

c 「作文」の材料と結びついている。

d 最後に、広く他教科との連合（Coordination）の面から見
て、生徒がその時習っている歴史、地理、自然科学などと関
連がある。

などの諸点を含まないといけないのである。このような学習活動相
互の関連づけを配慮した「方法」は、「読む」「書く」「話す」な
どの諸能力の総合的発達や、言語と文学との相互関係を求める学習
活動の特性と相応じている。この「方法」によって、その特性が発
揮されているのである。

学習活動とその方法において、特に注目されるのは、表現するこ
との重視である。

学習諸活動のなかでも、大多数がそうであり、とりわけその中軸と
思われる「テキスト解釈」「書く（作文）」の学習において顕著で

ある。口頭および記述による表現によって学習の進展がはかられて
いる。単なる享受、鑑賞という受身の学習活動を、表現によって、
積極的な自己活動に代えていくのである。さらに、表現によって
も、自由奔放な、空想的表出ではなく、表現することを通して、種
々の能力を養成し、鍛練するのである。「テキスト」に密着し、テ
ーマ、構想に忠実に従う表現は、分折力、推理力を鋭敏にし、推
理、表現をすぐれたものに仕上げていく。このように表現する作業
は、表現内容を正しく把握させる分折力、推理力を一体的に養成
し、さらに、それらの綜合的成果を表現化していく働きをするので
ある。

この表現活動を通して見てもわかるように、フランスの国語学習
活動は、いつも規範となる作品、言語事象に学習の出発点を置き、
進展の度毎に、その規範に照し、学習内容の正しさ、論理的明晰さ
を確認し、実証しつづおこなわれる点が最大の特徴であろう。問題
意識をもって、自由に生徒自身の思考を発展させるとか、生徒独自
の個性の伸長とかも、規範により、規範に従っておこなわれている
のである。個性の発揮への考慮はなされてはいるが、規範が示すあ
る水準へ到達させようとする鍛練に、学習活動の根本的性格があ
る。総則にも、「偉大なる精神と交流し、完璧な作品の範例を通し
て、個性を高尙、高貴たらしめ」とある。

おわりに

この「教授要目」は、学習指導の目標設定というよりも、学習内
容と学習活動を具体的に設定している。具体化は徹底しており、
いつ、どこで、何を、どのようにして、までが三項目にわたって決定

されているのである。そして、それらが、生徒の能力、技術、態度という被陶冶財からではなく、習得すべき知識内容——すなわち、陶冶財の観点からの設定である。これに加えて、今まで述べてきた学習内容、学習活動とその方法などの特性——教材は、古典文学作品中心であり、そこに標準的言語現象の規則と実態を見出すとともに、学習活動ならびにその方法は、その各々に一つ一つ型が確立し、方式が整備されていて、言語と文学の相互関係とか、「読み、書き、話す」諸技能を、古典文学作品という規範を通して学習していく——を考えると、フランスの国語科 (Lettre) は「論理的明晰性などの名をもつて呼ばれる高度の知的陶冶を重視する」フラン

ス中等教育の中核を形成している教科だといえる。さらに、フランスの中等教育の目標が、「一般教養 (Culture générale) を授け、「古典人文教育を中心内容とする高等教育への準備段階を構成している」点を考えると、国語科は、その性格上、最も重要な役割をにこなしていることがわかる。総則においても、「明晰、正確、論理とを知性に授け」、「個性を高尚、高貴ならしめ」、「伝統と思想という遺産を伝達するために」「最良の教育者だ」としているのである。全教科の基礎教科以上に、中等教育の目標達成に直接大きく働きかける中核の教科として設定されているのである。

(本学大学院学生)

資料

学年 要目	第 六 学 級	第 五 学 級
こ と ば の 学 習	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日常用いられる綴字法と句読法の学習とその確かめ、 2. 語彙の学習——派生語と合成語。 練習の場材による語彙の追加——語本来の意味と比喩的意味。 3. 変化語 (名詞、代名詞、形容詞、動詞) の形態。 変化語 (代名詞と動詞) の形態の意義と用法。 4. 独立節における語ならびに句の機能。 5. 文における節について、その概要を学習。 6. 語法の基礎原理 (これに属する知識は、講読ならびに暗読の練習の機会に教え、既習のテキストに言及しつつ授けねばならない)。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 綴字法の学習とその確かめ。既に熟知しているはずの動詞の形態について復習。 2. 音項 (第6学級2) と同一。——注 3. 独立節ならびに独立節中の動詞。文と文に含まれた句。 従属節の概要を学習。等位並置法；句読法。 4. 名詞の詳細について学習。名詞に付属する語 (冠詞、形容詞)、補語、名詞相当語句 (代名詞と動詞)。 5. 12音綴字法に関する基礎知識。シラブルの教え方、句切れ、節。(第6学級6の()内と同一)。

注 生徒は学習時間中いつもフランス語文法書、フランス語辞書を手もとに持っているようにする。

1. 綴字法、句読法の確かめ。分析の練習ならびにそれについての系統的取扱。
2. テキストに関するフランス語彙の口頭学習。
3. テキストの解釈と系統的読書指導。
4. 既に解釈されたテキストの暗誦（特に韻文のテキストは好適）。
5. 朗読の練習。
6. 観察ならびに描写の口頭による共同練習と書く練習。
7. 模範的作品として教室で読み、解釈済みの物語から、特に感動を受けたことを口頭で発表するとともに、記述する小練習。
- 注 教室におけるすべての練習では、教師は生徒が正しい文で表現することを求めねばならない。

作家作品

- I. テキスト解釈（エクスナリカゾン・デ・テキスト）。
1. 17世紀から現代までのフランス作家の散文ならびに韻文の選集。
2. ラ・フォンテーヌ；寓話。第1. 2. 3巻から選抄したも。
- II. 系統的読書指導
- A. 共通

1. _____
2. _____
3. _____
4. _____
5. _____
6. _____
7. _____
8. 問題を設けて、書物の内容を報告させたり、批評させたりしながら、生徒に正確で、気愉に表現することに馴れさせる以外の読書。
9. 文法的形式および他のいろいろな言いまわしによる思考の表現方法についての練習。

- I. テキスト解釈
1. _____
2. ラ・フォンテーヌ；寓話、第4. 5. 6巻。
3. アルフォン・ドーデ；風車小屋だより
4. IIのAに列挙した作品の中から特色ある文章について。
- II. 系統的読書指導
- A. 共通

<p>1. 中世の散文家、詩人達の抄出したコントならびに物語。 ただし現代語に翻訳されたもの。</p> <p>2. モリエール；戯曲選。</p> <p>3. フェヌロン；テレマック</p> <p>B. 近代語科</p> <p>1. 古代オリエント、ギリシヤ、ローマに関する作家達のコントならびに物語。ただし翻訳されたもの。</p> <p>2. 外国文学から借用したコントと物語。</p> <p>3. 世界発見と探検に関する物語。</p>	<p>1. _____</p> <p>2. ラッヌ；レ・ゾレデラール</p> <p>3. ヴイクトル・ユゴー；良心、ロランの結婚、アメリカ、あわれな人々。</p> <p>4. 19、20の世紀の散文のコントと物語、</p> <p>B. 近代語科</p> <p>1. 中世に関する作家達の翻訳されたコントと物語。</p> <p>2. フランス語に翻訳された古代のテクスト。</p>
--	---

注. 前学級のそれに相当する項目と同一内容の場合は_____で示し、省略する。

学年 項目	第 四 学 級	第 三 学 級
<p>ことばの学習</p>	<p>1. _____ (動詞の復習は除く)</p> <p>2. _____ 自由に使用できる言いまわしの増加。</p> <p>3. 動詞の詳細な学習 (動作、状態の動詞；時、法、人称、助動詞)。人称代名詞の学習。</p> <p>4. 文ならびにその諸形態。等位と従属接続詞。関係代名詞。疑問詞。従属節の詳細な学習。節における語、文における節の順序。</p> <p>5. 十二音綴詩法により詳細な学習；強調音と句切れ。その他多く用いられる詩法について学習。(_____)</p>	<p>A. テクスト解釈の際に。</p> <p>1. ことばと語彙の歴史に関する基礎知識。死語新語。語の意味——消滅した意味、古い言いまわしと新しいそれ。</p> <p>2. 起源から16世紀までのフランス文学の歴史に関する知識。(これらの諸知識は、これらを特に留意し、区分したテクストの解釈の助けを借りながら与える。)</p> <p>3. 詩法の学習。好哲性。律動。連の構成ならびに定型詩の原理の学習。</p> <p>B. 作文の場合に。</p> <p>1. 綴字法の確かめ。文法的正確さと表現の適切について。</p>

2. 書き方の教授。語と思想（詩歌、隨筆法、比喩、比較）。

文、思想の表現。感情的な文、綜合文、
文の語調と形態の選択。
思想の展開と脈絡。段落構成の学習。

注 —— フランス文学史の概観を加える。

1. 作文の練習。綴字法の確認。

2. 説いたテクニストを口頭で要約する練習。

3. _____

4. _____

5. _____

6. _____

7. 第4学級の8と同一——

8. _____

9. 計画された会話と討論の練習。

注 —— 又、生徒の意向に従って、同義語辞典をもた
せるのもよい。

1. テクニストの理解を確かめる問題を含んでいる書取。

2. _____

3. _____

4. _____

5. _____

6. 与えられた主題について、構想をたて、文章を作る口頭の
共同練習。

7. 主として物語や写生の性格をもつ簡単な作文。

8. _____

9. _____

10. 基礎的な語法の練習。

注 基礎的な知識は、各作品（テクニスト）解釈の作業に際して、
作者とその時代に言及しながら常にその適切な所で与えら
れよう。テクニストの学習は作文の指導としても有益である。

1. テクニスト解釈

1. _____

2. コルネーユ；ル・シット

3. ラシーヌ；エスデル

1. テクニスト解釈

1. _____

2. 中世期の詩集

3. コルネーユ；一作品（選択した）

実施すべき練習

作家

家

<p>作 品</p>	<p>4. ボンロー；諷刺詩の拔萃。讀面台。</p> <p>5. Iの1〜4までのテクストのうちから特色ある文章について。</p> <p>I. 系統的読書指導</p> <p>1. 現代フランス語に置した「ローランの歌」の拔萃。</p> <p>2. モリエール；貴族市民。守銭奴。</p> <p>3. ジョルジュ・サンド；藍の沼</p> <p>4. メリメ；小説抄拔萃本。</p> <p>5. B. 2と同————</p> <p>6. 歴史で学んだ時代の、精神的物質的文化に関係あるフランスならびに外国——翻訳された——の作品。</p> <p>注 近代語科の特別時間の2時間には、古代の作品の翻訳されたものについておこなってもよい。</p>	<p>4. ランヌス； () ()</p> <p>5. モリエール； () ()</p> <p>6. セザイニエ夫人ならびに17世紀の書翰作家達；書翰選。</p> <p>7. シャトーブリアン；拔萃文</p> <p>8. 19世紀詩人達の詞華集</p> <p>II. 系統的読書指導</p> <p>A 古典語B. C科、および近代語科</p> <p>1. フランス語に翻訳された古代の作品、特に次の諸作品の拔萃。</p> <p>ホーマー ；オデュッセイ ヴリイゼイド；アウリアスのイラダニー、アルセスト プルタルコス；英雄伝</p> <p>B 近代語科</p> <p>1. フランス語に翻訳された古代の作品、特に次の諸作品の拔萃。</p> <p>ゾロート ；戯曲選、 ヴァーゼル；牧歌</p> <p>2. 6と同、————</p>
------------	---	--

<p>学年 項目</p>	<p>第 二 学 級</p> <p>A テクスト解説に際して。</p> <p>1. _____</p> <p>2. 16世紀から18世紀はじめまでのフランス文学史に関する</p>	<p>第 一 学 級</p> <p>A.</p> <p>1. _____</p> <p>2. 18世紀はじめから現代までの文学史に関する知識。</p>
------------------	---	---

<p>の 学 習</p> <p>知識 (—————)</p> <p>3. _____</p> <p>B. 作文のほかに。</p> <p>1. _____</p> <p>2. _____</p> <p>3. _____</p> <p>知的誠実さ、真摯さ、思考と形式との一致。</p>	<p>(—————)</p> <p>3. _____</p> <p>C.</p> <p>1. _____</p> <p>2. _____</p> <p>3. _____</p>
<p>実 施 す べ き 練 習</p> <p>1. 作文の練習。物語 (性格、風俗などの) 描写、手紙、論文、 対話、文学的、道徳的小品。</p> <p>2. _____</p> <p>3. _____</p> <p>4. _____</p> <p>5. _____</p> <p>6. _____</p> <p>7. _____</p> <p>8. _____</p> <p>9. _____</p>	<p>I. テクスト解釈と系統的読書指導</p> <p>1. _____</p> <p>2. モンテーニュ; 拔萃</p> <p>3. _____</p> <p>4. _____</p> <p>5. _____</p>
<p>作 家</p> <p>I. テクスト解釈</p> <p>1. _____</p> <p>2. 16世紀の詩集集</p> <p>3. _____</p> <p>4. _____</p> <p>5. _____</p>	

作

品

6. ボスエエ；説教と追悼の辞。

7. ラ・フオンテニス；寓話、第7〜12巻

8. ラ・ゾルイエール；カラクテール

9. モンテスキュー；偉大と麴踏ベルシヤ人の手紙

10. ヴォルテール；物語と書翰

11. 19世紀小説の抜萃

12. (9と同一)——

II. 系統的読書指導

A. 共通

フランス文学に關係をもつ外国の作品 (翻訳)

a. ドイツ文学 ニールンベルグ；ゲーテ；シラー

b. 英 文 学 シュークスピア、ウォルター・スコット 19世紀抒情詩人

c. スペイン文学 物語。セルバンテス (ドン・キホーテ) 17世紀の戯曲

d. イタリア文学 ダンテ、ペトラルカ、マンゾネ

e. 現代文学の主要作品 トルストイ、ドストエーフス
キイ、イブゼン、キツプリング、ダ
ヌンチオ

B. 古典語料A. B. および近代語料

フランス語に翻訳された古代のテクラスト、特に次の作品の
抜萃

ホーマー；イリアード ヘシオドス；耕作と日々

エシロス；鎖につながれたゾロメテニス、ベルシヤ

クセノンホオン；回想録

C. 近代語料

キケロ；ヴェリイヌ・カテリリーナ攻撃演説。老年について
ホレウス；オード、諷刺、書翰詩。抒情詩選

6. バスカル；プロヴァンシナル、冥想録

7. ボフロー；詩法、書翰詩

8. ヴォルテール；抜萃

9. ルソー；

10. デイドロ；

11. ロマン派戯曲

12. 19世紀の詩の傑作

13. 19世紀散文の傑作 (物語、評論、歴史)

II. 系統的読書指導

A. 古典語料と近代語料

フランス文学に關係をもつ古代の作品 (翻訳)

ソホクレス；アソテイゴーン、エディボス王

プラトン；ソクラテスの弁明。クリトン。

デモステネス；フリリッパ王位についての論議。

B. 近代語料

フランス語に翻訳された古代のテクラスト特に次の作品の
抜萃

キケロ；友情について、その他

ヴァージェル；エネイイド

タシット；年代記、歴史書

セネカ；抜萃